

大豆近況 VOL.152

団体会員
一般会員 各位
賛助会員
協賛企業

関係部署にご回覧ください。

令和3年7月5日
一般財団法人 全国豆腐連合会
会長 東田 和久
相談役 郷 和平

「大豆近況」をお届け致します。是非、ご活用下さい。

○北米産大豆

米国農務省が6月10日に発表した、2021/2022年度の米国大豆需給予想によりますと、作付面積・単収が据え置かれたことで生産量も1億1,988万トンと前月から据え置かれていましたが、搾油の減少を受けて期初在庫が上方修正されたことで、総供給量が上方修正されました。一方で、需要面での数値が全て据え置かれたため、期末在庫は422万トン(在庫率3.5%)に上方修正されております。

また、世界の大豆生産予想は、主要な生産国における増減はなく、3億8,552万トンと儀かに下方修正されましたが、ブラジルと米国における期初在庫の増加を受けて期末在庫は1.6%増の9,255万トンに上方修正されております。

なお、同省が6月28日に発表した、6月27日現在の米国主要生産州での発芽率は96%(前年94%、平年92%)、開花率は14%(前年13%、平年11%)と前年並みに推移しております。

米国大豆の作柄概況では、主要生産州の平均で優良と良好の合計が60%となっており、前年同時期を11ポイント下回っております。米国コーンベルトの主産地での乾燥天候により土壌水分が不足しているためで、特にミネソタ州、ノースダコタ州、サウスダコタ州での土壌水分が不足しており、開花期に向けての作柄悪化や生育遅延が懸念されております。

6月のシカゴ相場は、期近7月限が\$15.40/ブッシェル付近から始まりましたが、大きく値を崩す波乱の展開となりました。序盤は世界的な植物油不足懸念や北米産地での高温乾燥天候の流れを引き継いで相場は上昇し、一時は16ドル台に乗せる場面もありました。しかし、10日の米国農務省による需給予想発表でブラジル産大豆の期初在庫と米国大豆の期末在庫の上方修正を受けて反落しました。その後、米政府がバイオ燃料のガソリンへの混合義務緩和を検討しているとの情報を受けて相場下落に拍車がかかり、さらには17日のFOMCで米国のゼロ金利政策解除の方向性が示されたことを受けて、ファンドのパニック的な手じまい売りが入り、一晩で\$1.23/ブッシェルもの下落となりました。直後は値ごろ買いによる自律反発、中国による連日

の米国大豆成約等を受けて大きく買い直され、下落幅の半分程度まで買い戻される展開となりましたが、干ばつが懸念されていた中西部の大豆産地にまとまった降雨の予報が出たことで再び下落しました。下旬には7～9月の長期予報で米国産地の天候が高温乾燥になるとの予報から、大豆の作柄悪化が再び懸念され相場は反発しており、6月30日現在、期近7月限が\$13.56/ブッシェル付近で推移しております。

6月の円相場は、1ドル=109円台半ばから始まりました。序盤は方向感に乏しい展開に終始し、中旬にFOMCにより利上げ時期の前倒しの方向性が示されると米国の長期金利が上昇し、日米の金利差拡大観測からドル買いの流れが優勢となりましたが、FRBがインフレ抑制に動くとの見方から長期金利の上昇は一服し、ドル買いの流れも鈍化しました。その後も110円台での狭いレンジでの推移が続き、6月30日現在、1ドル=110.50円付近で推移しております。

○国産大豆

令和2年産国産大豆の第6回入札取引が6月16日に実施され、全国で5,076トンが上場され、落札率は86.39%でした。前回までと同様に納豆銘柄の不落が目立ちますが、それ以外の銘柄については、ほぼ落札されており高い落札率を維持しております。平均落札価格は、普通大豆:¥11,329/60kg(前月比△¥418)、特定加工用:¥10,967/60kg(前月比△¥228)で全体の平均落札価格は¥11,245/60kg(前月比△¥390)の結果でした。高値を維持していた九州産大粒フクユタカの価格が下落しており、全体の平均落札価格を下げた格好となっております。次回入札は7月14日に予定されており、約2,500トン(前月の50%)の上場見込みです。これが令和2年産の最終入札となりますが、大きな混乱無く終了することが望まれます。

北海道農政部によると、令和3年産北海道産大豆は5月下旬の降雨の影響で播種作業は遅れたものの、生育は平年並みに推移しているとのこと。今後の順調な生育が望まれます。

以上